

語り部ニュース

発行・NPO法人
舞鶴・引揚語りの会
住所・625-0133
舞鶴市字平
舞鶴引揚記念館内
TEL
0773-68-0568

原田二郎氏シベリア抑留体験の講演



三月十二日綾部市梅迫町老人会の学習会から依頼を受け会員の原田二郎氏が先の戦争後のシベリア抑留体験を約一時間講演した。

きズルチン、サッカーで味付けした物を口に入れ、親の苦労も何一つ知らないで、大きくしてもらい今日に至っている。“楽あれば苦あり”と言います。今日では、みんな年金があり平和な暮らしが出て来ているが、再びそのような苦境が訪れる。

属された。暫くして野戦病院設営となり、器材の梱包に苦勞して設営地は方正であった。野戦病院とはいえ、患者は主に南方から送られてきて満州での負傷兵ではなかった。傷口は時間と共に腐敗し、ウジが骨まで達している様は、今でもぞつと

する。毎夜、“殺してくれ、殺してくれ!”と痛さにこらえきれず叫ぶ声が脳裏に残っている。八月九日ソ連軍と開戦、弾はあるのだが武器がない状況で、全く戦うすべがなかった。弾薬庫には在庫あるのだが肝心の鉄砲や大砲がない武器は南方に送って残ってなかった。八月二十五日頃、方正の野戦病院で武装解除させられジャムスに移動しそこで収容された。移動途中の道々には、満蒙開拓団の婦女子の死体が裸で転がされていた。その光景は思い出したくもない無残なものだ。今も忘れ



られないのは病院の前を通る開拓団の婦女子の事だ、男は全て招集され若い女性が裸同然で、腰紐で乳飲み子を背負い、片手では小さな子供の手を引き裸足で、とぼとぼと歩く姿だ、どうする事も出来ない、何もしてやれない、何ともやりきれない思いは今でも覚えてくる。引き揚げてから夜中にこれ等の夢を見る事が多く、朝まで眠れなくなる、ここ三十年ほど前から、病院で睡眠薬を処方されていたが、一昨年このことを講演で話した方々にお願した。《どうか皆さんも満州で逃避行された人の身になっていただきたい》と、その後、不思議な事に五十年悩まされていた「悪夢」を見なくなりました。

シベリアでの四年間の抑留生活については大工仕事を中心に食

生活の状況などはアカザ、タンポポ、アザミの草を示し、またクロパンの大きさを食パンで見せ、満州の病院では下痢は消し炭で治したと実物を示しながらの講演であった。訥々と話す内容は実体験に元づくことですから聞く人の心に沁みる講演であった。“楽あれば苦あり”先々を気にかけているという言葉は忘れられない。トヨタ

NPO法人への寄付金減税で促進する。

先日、鳩山首相はNPO法人に対しての税制面からの支援対策に、政府税制調査会に『力強くやれ!』と指示したとの報道を読んだ。教育や子育て、街づくり、福祉などの分野で行政のみに頼らず、市民自ら協働して社会を支える理念とする活動のことを《新しい公共》と呼び、仙石氏を担当相として税制優遇や規制緩和な

ど総合的な支援策を今四月末までにまとめる予定とのことである。

税制面では現在、福祉や教育、国際協力などの分野で「公共性があると」国税庁が認定した「認定NPO法人」に対して個人が寄付（五千元以上）をした場合、寄付相当額が非課税になる所得控除がある。しかし所得控除は高額所得者には有利に働くが、それ以外の低税率の方々にはメリットは少ない。このため所得控除から税額控除として、寄付金額の一定割合を課税額から直接控除する仕組にしようとするもので大いに期待できる。

なお、寄付文化について、アメリカと比較すると寄付をする個人の割合で日本は申告納税者の2、2%に対しアメリカは個人納税者の30%、個人寄付の総額は日本0、26兆円に対しアメリカは20、4兆円である。豊田

連載

一兵卒のシベリア抑留記

著者・門間祐太郎
編集・南澤武

シラミ

馬糞餛飩や糞尿粉末の蒸し焼きはまだ無

ガイドの

その一

閑散とした館内を手持ちぶたさで歩いていたら年老いた女性がつかつたに寄ってきた。つつきりガイドを乞うて来たのかと思っていると、いきなり『この記念館は存在意義がない』と言うではないか。いきなりのカウンターの思わず、『何故ですか』と問うと、『いくら苦労しても生きて帰ってこられた人はいいい、水浸く屍となったり、草むす屍となったり人はいうかばれん、何故この記念館は戦争の責任を厳しく問わないのか、知覧もそうだが』と言うではないか。厳しく私を追及するので、『いや私はただのボランティアガイドです。そのような事を言われてもお答えできません』と言った逃げたが後味の悪い一日ではあった

その二

二十代のカップル『案内しますよ』と言うと『是非に』と

力道山とかシャープ兄弟が活

て野天で毛布を引つかぶって横になると、今度は蚊や蚋(ブヨ)がたちまち首筋や袴下の足首のところから滑り込んできてところ構わず刺す始末です。どうやっても体中びっしりついて肌から去ることがなかったシラミ様も一斉に逃げ出すときがありました。それはそれまで動いていた人が死体になった途端です。この死体を

生物ですから持ち込めない工夫をすれば何とか凌げますが、シラミの来襲もまた凄まじいものがありました。機会がある度に、よく肌に着るものを沸騰湯に浸したり、作業場が変わるたびに素っ裸にさ

れ、完全消毒され、新しい作業服と交換させられるのでしたが、それでも肌にはシラミがつかまりました。寝台には南京虫を防ぐと寝台の脚に空き缶に水を満たして置いたりしてみましたが、南京虫どもは

夜中に天井を伝わって、丁度へその真上辺りに落ち込んできます。飯ごうのフタや空き缶を上向いて置いておくと、夜中にボタンボタンと音をたてて落ち込んできます。南京虫から逃れる為に屋外に出



二月二十八日
朝日新聞の《声》の欄に“抑留法案今度こそ成立願う”という江木という方のコメントが載っていた。シベリアに四年抑留され、過酷な炭鉱労働をして日本に帰ってきた。数十年たつて日本政

府から銀杯が届いた。何年か前には十萬円の旅行券が追加で届いた。部屋の隅に置いた銀杯は当時の苦境を思い出させる。旅行券は老境の私には無理で、孫達の旅行費用に消えた。昨年、臨時国会に特別給付金の支給など盛り込んだ「戦後強制抑留者特別措置法案」が提出されるとのニュースを聞いた。古びた石油ストーブを買い替え、この冬こそ暖かい居間で過ごそう、近くに住む戦友と温泉で昔の事を語り明かそうと約束していた。しかし国会の混乱で法案提出は見送られた。友は年末に他界

『いくらでも』と言うではないか、このようなお客さんにはこちらから自然と力がこもる。年表からはじめて1時間余りの説明をしてあげた。最後は白樺日記と俘虜郵便。非常によく理解できたとお礼を述べて帰っていった。それから十日後、当番で行くと机の上は大変丁寧な札状が届いていた、しかも男女それぞれにお礼の言葉が書いて有るではないか、最近の若い人はとよく言われるが、このような札状を頂くとは本当に励みになる。今後とも『一期一会』の心を大切にお客様と接していこう。

『有り難うございます』というが、こんな経験は初めて相手は話の内容から自分と同年代である、自分のことを随分な年寄りと思ったのだらう、複雑な気分であった。記念館とはその存在意義を認めない人、歴史の事実を再認識した人、涙を流しながら平和の有り難みを訴える人、人それぞれ価値観がぶつかり合うところである。森下

してしまった。私の夢ははかなく消えてしまったかと思つたが、法案は改めてこの通常国会に提出されるという。

元抑留者の生き残りは八万人ほどしかない。今度こそ与野党一致して、私たちの願をかなえてほしい。というものであった。強制抑留者も八万人しか居らないのか！年々、体験者は他界し、あの忌まわしい戦争で生死の間を潜り抜け、日本に帰還して必死に働き今日を構築した方々の次世代に託す思いは単純な言葉で表現できる物ではないと思う。複雑かつ精神的なものも含めて舞鶴引揚記念館に詰まっている。

豊テ

2月の活動実績

稼動日数 28日
ガイド数 3,083人
予約数 5件
予約人数 175人
稼動会員数 19人
募金箱 21,252円